

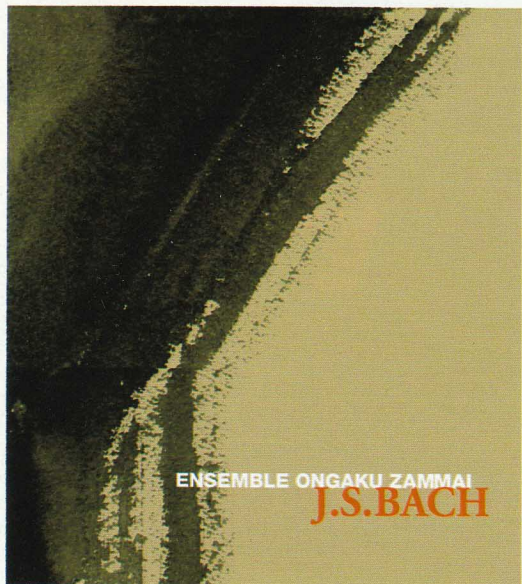
サライCDレビュー

聴く

文／
黒田恭一
(音楽評論家)

バッハを今なぜ編曲するのか？ その意味がわかる洒落た一枚

● バッハ・パッサカリアほか／音楽三昧



ENSEMBLE ONGAKU ZAMMAI
J.S. BACH

アンサンブル「音楽三昧」は6人の古楽器の演奏家たちが結成したグループである。「バッハ・パッサカリアほか」では、彼らがバッハのオルガン曲を編曲して演奏している。「音楽三昧」は、同時に、これと対をなす、バッハのチェンバロ曲を編曲して演奏したアルバム『24のプレリュード（平均律第1集）』も発表した。「パッサカリアほか」をおききになって、ご興味をもたれたら、そちらのほうも是非、どうぞ。

オリジナルが十分に素晴らしいのだから、敢えて編曲などする必要はないだろう、とお考えの方も多いであろう。何を隠そう、ほく自身も、彼らの演奏を実際に耳にするまでは、そう思っていた。ところが、「パッサカリア」にしても、「トッカータとフーガ」二短調にしても、彼らの演奏でふれると、オルガンによる演奏でできていたときにはわからなかった、それぞれの音楽の仕組みの興味深さに気づくことができた。

ライトをあてる角度を変えたことで、美しい人の、別の魅力を発見するのに似ていた。田崎瑞博の編曲が、とりあげている音楽の本質を深いところにとらえ、「音楽三昧」のアンサンブルとしての持

味を正確に把握したところだなされていたからである。コラール前奏曲「いと高きところには神のみ栄光あれ」の、4つのタイプオリジナルによる4つの演奏という、音楽好きを喜ばせる洒落た仕掛けもあって、ききてもまた音楽三昧の楽しさを味わえる。

▶2007年録音 発売／レゲルス

CD45・983・95996

番CRT・1100 価2625円